

---

# バカと居眠りとAクラス

nature

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと居眠りとAクラス

### 【Zコード】

Z7700Y

### 【作者名】

nature

### 【あらすじ】

学園居眠り時間歴代最高記録を1年で塗り替えた男「緑野 魁人」。

。 その男がなんで学年次席？！

幼馴染の佐藤美穂、親友の明久、雄一らと繰り広げる学園ラブコメディー！

どうぞお楽しみ下さい！……楽しませられるかなあww

Aクラス中心でやってくつもりなのでFクラスはあまりだせないかも…。

初投稿なので変かもしだれませんがよろしくです！  
作者は受験生なので更新は不定期です。  
加えて作者の自己満小説になる可能性があります。  
嫌だ！つて人はお戻り下さい。。

## ♪♪♪（前書き）

はじめまして。naturieです。

初投稿になります。どうぞよろしくお願いします。

## ふるわーぐ。

春。　　ここ文月学園ではクラス発表が行われていた。

「ふわあ～…。眠いなあ…。」

万年居眠り男「緑野 魁人」は大欠伸をしながら学園内を歩いていく。

「…先生を無視してどこへ行く。自分のクラスが知りたくないのか？」

生徒から「鉄人」と呼ばれ恐れられる補修教師、西村が血管を浮き上がらせながら言つ。

「…おはようつす。」

「明らかに嫌な顔をするな。ほら、振り分け試験の結果だ。」

魁人は封筒を受け取り、空けようとする。

「実は、先生はお前を1年間見てきて「こいつは吉井と並ぶFクラス候補なんじやないか？」

と思っていた。授業は居眠りテストも真面目に受けてなかつたらな。」

やつと封筒を開け終わり中身を見る。

「緑野 魁人 Aクラス 次席」

「どうやら先生が間違っていたらしい。すまなかつたな。」

「いや、悪いのは俺の生活態度ですから。謝んなくていいですよ。  
じゃ、俺行きますね。」

「ああ。出来れば居眠りはもつやめろよ」「無理っす。」…即答か。

「じゃ、残り頑張って下さー。」

そう言って魁人は昇降口へ向かった。

これから魁人のAクラスでの学園生活が始まる・・・。

## ふるわーぐ（後書き）

記入していますが、更新は不定期です。  
ご了承下さい。

## 主人公紹介！

名前 緑野 魁人（みどりの かいと）

性別 男

身長 175cm

体重 62kg

見た目 顔は中性的。つてかどっちかというと女子。だがなぜか女子に見られることはない。

髪は愛子を少し長くした感じの茶髪。

体型はちょっとやせてるかな？ぐらい。

性格 基本優しい。でも眠気によつて機嫌が悪くなつていく。眠いときに誰かに寝るのを邪魔されるとブチ切れる。友達や弱い人をいじめる奴は大嫌い。そのときもブチ切れる。また、かなり面倒くさがり。でもやる時はやる。やつていいことと悪いことの区別をしつかりつけていく。

得意教科 数学（真面目にやれば1年の時毎回余裕で1位をとれた  
ぐらい）

苦手教科 英語（勉強する意味がないと感じているから）

召喚獣 そのまま小さくした感じ。

服は剣道の胴着、袴。

武器は竹刀。特別な効果があり、

基本どこを打つてもダメージは低いが、

面、小手、胴、突きの位置（頭、両手、腹、喉）を的確に

打つと

相手の元々の点数の半分のダメージを与える。つまり、2回的確に打つたら相手は補習行き。

腕輪 もう決めてあります、秘密です。

A対Fが終わつた辺りで更新するつもりです。

その他 中学まで剣道をやっていた。同じく中学で剣道をやつていた（という設定）の須川と知り合い。何回か試合をしたこともある。

しかし、足に重大な怪我をしたため、

今は文月の剣道部のコーチを気が向いたらしている。

美穂とは保育園からの付き合い。

明久は小学校、雄一は中学校で出会つた。

雄一と初めて会つたときに…？

自分以外への恋心には敏感だが、自分がもてると思つていないため、

自分に関してはかなり鈍感。

1人暮らしのため家事は大体できる。

どうせ食うならうまいものが食べたい、という理由で料理は異常にうまい。

居眠り時間学園歴代最長記録をもつてゐるが、頻繁に更新されるので、

正確な記録はわからない。

## 第1話 設備で重視する「」。

「そういうえば、あいつは『』のクラスになつたかな……」

魁人はAクラスへあるきながらそう呟いた。

「おっ、ここか…でかいな。」

入つたAクラスには教育施設とは呼べないくらいの設備が揃つていた。

リクライニングシート、個人エアコン、冷蔵庫、パソコン etc

…。

「あつ、魁人くん！」

誰かが魁人に気づいたらしく、走つて駆け寄つてきた。

「ん？ お、美穂か。お前もAクラスに入れたんだな。」

走つてきたのは先ほどの「あいつ」こと幼馴染の「佐藤 美穂」だつた。

「はい。魁人くんと同じクラスになりたくて、頑張つて勉強しましたから…。」

「へえ～、そいつは殊勝なこつたな。ま、1年よろしくな。」

魁人は前半部分の意味を理解していないうでそう答えると、

「はい…。そういうえば、この教室って大きいですね…。」

少ししおげでいる美穂は教室を見渡しつつ、いつ言った。

「ああ、そうだな。」

普通の人ならばここで「勉強しやすそう」とか「快適そうだよな」とか言いそ่งだが、それに対して魁人は

「寝やすそうだ。」

「…教室に関しての感想がそれですか…。」

学園居眠り時間歴代最高記録男はそう答えた。

てつ経し少かられそ

「皆さく、席について下れ。」

クラス担当の高橋が教室に入り、そう告げる。

「ん？ 時間か。」

そうは言つても席に座つて話していたので動くことは無い。

ちなみに魁人は偶然席が近かつた美穂と話していた。

「そうみたいですね…。」

「では、自己紹介をしようと思います。廊下側の人からお願ひします。」

「あつちからか…。」

ちなみに魁人の席は窓側から2番目なので、結構後半の方になる。

「…自分の番まで寝てるから、順番が来たら起こしてくれるか？」

「はあ…、仕方ないですね。」

魁人は美穂にそう告げ、3秒で寝る。

「…人くん。魁くん。次ですよ。」

「…ん？ そうか。ありがとうございます。」

魁人は寝ぼけ眼をこすりながら笑顔でそう言つ。

「いえ…／＼。」

美穂は少し顔を赤くし、前を向く。

美穂の席は魁人の右隣である。

「さて…、俺の番か。まあ、対して特別なこともないが…。」

前の人気が終わり、魁人は立ち上がる。

「俺は緑野 魁人。好きなことは寝ることだな。1年間よろしく。」

「

魁人はそう皆に告げるとすぐ席に座る。

「俺の番も終わつたし、また寝るか…。」

そうしてまた魁人は眠りについた。

「…何であいつが…？」

クラスメート達がそう呟き始めた頃にはもう寝息を立てていた。

## 第1話 設備で重視するJRP。（後書き）

いきなり「メント」がきて驚きました…。

餓鬼さん、本当にありがとうございました！

感想など書いて頂けると作者は気が狂う程喜びます。

今回見て下せつた皆様、出来れば次回も読んで頂けるとありがたいです。

感想、アドバイスなどお待ちしています。

では、読んでいただき、ありがとうございました！

## 第2話 代表さん達と顔合わせ！（前書き）

ちよつと一話一話の文字数が少ないかな？ついこの頃思っています。

## 第2話 代表さん達と顔合わせ！

「……ん？自己紹介、終わったのか…。」

全員の自己紹介が終わり、5分ぐらい経つて、魁人は起きた。

「……ちょっとといい？」

「ん？いいけど…あんたは？」

「……私は霧島 翔子。学年次席つてあなたで合ってる？」

このクラスの代表であり、学年主席である「霧島 翔子」が魁人に確認をとる。

「一応、そうらしいな。霧島さんが主席？」

「……そう。でも、あなたが次席になるとは思わなかつた。」

「ま、田頃の生活態度はいいとは言えないし、テストも適当だつたからな。」

魁人も確認をとり、翔子は肯定する。

翔子もまさか魁人が次席になるとは思わなかつたらしく、驚いている様子。

「まあ、1年間、よろしく。」

「……よひしへ。」

魁人が自己紹介のときと同じことを言つと、翔子は目的を果たしたらしく、自分の席に戻つていった。

「へえ～、キミが次席なんだ。ボクはてっきり次席は久保くんだと思つてたよ。」

「僕も、次席はもらつたと思ってたけどね。まだ、甘かつたみたいだ。」

「…あんたらは？」

今度はボーイッシュな感じの女子と、眼鏡をかけた知的な男子が魁人に声をかけてきた。

「ボクは工藤 愛子。ヨロシクね。」

「僕は久保 利光だ。よろしく頼む。」

「ああ。緑野 魁人だ。よろしくな。」

魁人は「工藤 愛子」と「久保 利光」と自己紹介をすませる。

「ホントは優子もつれてこよつと思つたんだけど…。」

「今は自薦したいらしいね。」

「眞面目だな。そいつは。」

愛子は「木下 優子」もつれてきたかつた、というが、自習をしたい、と断られたらしい。

「まあ、いきなり自己紹介から寝てる緑野くんからしたら皆眞面目かもね。」

「…嫌味か？」

「そんなことはないけどね。ただ、結構有名だよっ・緑野くん。」

「そうなのか？」

愛子はいたずらっぽく魁人に言つと少し顔をしかめて答える。

そして、魁人は結構有名だといつ。

「魁人君は知らないのかい？」

「何をだ？」

久保も知つているらしく魁人に言つ。

「魁人君は、1年で学園居眠り時間歴代最高記録を塗り替えたって有名なんだ。」

「…なるほどな。」

「だから、その魁人くんがなんでAクラスに入れるのかつて、皆不思議みたい。魁人くんの自己紹介の後、皆ちょっとそれで騒いでたけど…。」

「俺は自己紹介が終わつたあとまたすぐ寝たからな。」

久保は魁人が有名な理由を話し、愛子が、魁人の自己紹介のあとざわついたのはそのせいだと囁く。

「まあ、今次席になつてることとは十分な実力があるつてことだよね。」

「そつだううね。まずは縁野君を目標にやらせてもうつよ。」

「はは、まあ頑張つてくれ。じゃあ、俺はちょっと廊下に出でくるわ。」

「うん、行つてらっしゃい。」

愛子と久保が魁人の実力を評価すると、魁人は少し微笑みつつ返し、廊下に出でくるといつ。

「ああ、行つてきます。」

「ん？あれは…。」

魁人は知つた顔を見つけたらしく、声をかけようとする。

「おーい、明久、雄一！」

「ん？」

「あ、魁人君！」

魁人は親友、「吉井 明久」と「坂本 雄一」を見つけ、近付く。

「よう。お前はどこのクラスになつたんだ？」

「てっきり僕らと一緒に思つてたけど。」

雄一が何クラスになつたか聞くと、明久は魁人の実力を知らないため、同じFクラスだと思った、という。

「おいおい、おまえらと一緒にするなよ。」

「で、どこなんだ？」

「Aだ。次席になつた。立派なもんだう~」

「へえ~。…ってAで次席? ! うそお? !」

魁人がA、学年次席というと明久は飛び上がらんばかりに驚く。

「やっぱりな。1年のこりからおかしいと思つてたんだよ、お前があの成績なのはな。」

雄一は予想がついていたのか、あまり驚かない。

「へえ～、お前にはお見通しだつたつてわけか。」

「そういうことだ。…おっと、先生が戻ってきたみたいだ、俺らは戻るぞ。」

「ああ、じゃあな。」

「またね～。」

FクラスはまだHRが終わってないらしく、2人は教室に戻つていった。

「…で、なんであの先生は机を持ってきてんだ?…まさかな。」

魁人はFクラスの担任らしき先生が、机を持ってきているのを不審に思つたが、まさかそこまでボロくないだろう、と思い「机がもう壊れたから」という考えを頭から消した。

「…さて、そろそろ戻るか。」

そう言つて魁人は新校舎、そして教室へと戻つていった。

## 第2話 代表さん達と顔合わせ！（後書き）

魁人はなんとなく散歩で旧校舎まで行っていました。

またコメントを頂きました！

紫苑さん、本当にありがとうございました！

### 第3話 血盟ついて覚めたための時間でしょう？（記書き）

明日期末テストです。

え？ 勉強？ 何ソレおいしいな（殴

### 第3話 自習つて寝るための時間でしょ？

「はあ？ 自習？ 初日からか？」

「そうみたいですね。なんでもFクラスがDクラスに試召戦争をしがけた、とかで…。」

魁人が教室に戻ると、美穂が今日は自習だと言つたらしく、驚いた様子で言つ。

「雄一… いきなりか…。」

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっととな…。」

(あいつのことだからな…。A前のちょっととした仕掛けつてとか…。)

魁人は理由に心当たりがあるらしく、雄一の名前を呟く。

「まあ、自習なら堂々と寝れるしな…。」

「…魁くん、自習は寝る時間じゃありませんよ…。」

自習だと分かつたら魁人はすぐに居眠り宣言をする。

「自習なんですから、少しは勉強したりどうですか？」

「ん…。課題は出てるか?」

「出でます。プリンスト3枚だけですけど…。」これを今日中にやれつて。」

美穂に言われたため、課題だけはやろひと思つたのか、課題はあるか聞く。

「教科は?」

「全部数学です。」

「数学か…。ちやつちやと終わらじして寝るか…。」

「…結局寝るんですね…。」

教科を聞き、終わらせたあとやはつ寝る返りじへ、美穂はため息をつく。

「…よし、終わった。」

「え?ーもう終わったんですか?ー」

始めて3分程でもう終わつたらしく、寝る体制に入る。

「あれ？ 總野くん？ 寝るなら課題終わらせてから…。」

「…もう終わつてます。」

「え？…ホントだ…。」

愛子が魁人が寝ようとしているのに気づき、声をかけると美穂が魁人のプリントを見せる。

「本気だしたらこんなもんだ…。基本の確認程度だつたしな…。」

「だつて言つても…。代表でもこんなに早く終わらないよ…。」

愛子が翔子の方を見ると、翔子でもまだ一枚目がやつと終わるとこうだつた。

「本当に人間かどうか疑っちゃうよ…。」

「…ですよね…。」

愛子と美穂はため息をついて魁人を見るともう眠りに落ちていた。

「でも、緑野くんつて寝顔かわいいよね こうじてると女の子みたい」

「え？！／＼／＼そ、そうですね…／＼／＼

愛子が魁人の寝顔を見てそう言つと、美穂もそれを見て顔を赤く

する。

「ん？ その反応…。なるほどねえ」

「な、なんですか？！」

「い、いや、なんでもないよ じゃあボクは戻るねえー」

愛子はおもしろいものを見つけた、とこつぶつに笑うと、自分の席に戻つていった。

「もひ…。さて、私も課題を終わらせないと… // /

美穂は課題を終わらせようとするが、魁人の寝顔が気にならしく、なかなか進まなかつた…。

「ん、 美穂か。 お前はまだ帰らないのか？」

魁人が起きたのに気づき、 美穂は魁人に声をかける。

「はい…。あの、 よかつたら、 なんですけど…。」

「ん? どうした?」

美穂は何か頼み? があるらしく、 魁人に言いつ。

「…一緒に帰りませんか?」

美穂は顔を赤くしつつ、 そう魁人に言いつ。

「ん、 別にいいぞ。 保育園からの付き合いなんだから、 そんな遠慮することないだろ。」

ただ、 魁人は友達感覚で言つてていると思つていてるらしく、 そう答える。

「 そうですよね…。 はあ…。」

美穂は魁人が自分をただの幼馴染だと思っていてると思つたらしく、 ため息をつく。

「ちょっと緑野くん。 そういう態度は感心しないなあ。」

「ん? 工藤さんか。 どういづことだ?」

そこへ愛子が声をかけてきた。

「どういって…。魁くん、美穂ちゃんが幼馴染だからうつただそれだけの理由で誘つたと思つてゐるの?」

「ああ。他にどんな理由がある?」

「はあ…。これは思つてた以上に強敵だね…。頑張つてね…。」

「はい…。わかつてましたから…。」

愛子は魁人の返答に少し呆れ気味に言つて教室を出て行つた。

「? なんなんだ?…まあいいか。美穂、帰るぞ。」

「あ、はい!」

魁人は意味がわからない、といふように首をかしげると美穂に声をかけ先に教室をでていく。

美穂もかばんをもつて、すぐ後を追いかけていった。

### 第3話 血腫つて寝たための時間でしょう？（後書き）

タグで主×優子とか書いといて全然優子が出せない…。

つ、次は出せると思います！

次も読んで下されると嬉しいです！

それではー、お読み頂き、ありがとうございましたー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7700y/>

---

バカと居眠りとAクラス

2011年11月24日18時46分発行